

法政アクティブリサーチ 寺川クラス 平和スタディツアーを企画しよう！

担当教員：寺川 史朗

1 テーマ

法政アクティブリサーチの授業を担当するなんて絶対無理！と思ってきました。アクティブラーニング、フィールドワーク、グループワーク・・・私がもっとも苦手とする教育手法がてんこ盛り。学部内職務の関係で運営に少しだけ関わる機会がありましたが、そのときも「やっぱりオレには無理！」。そんな私が今回この授業をはじめて担当することになったのは、特段理由があるわけではなく、これまで何度となく「一緒にやろう」と誘ってくれた同僚教員に断り続けてきた負い目があったからです。結論から言うと、やってよかった！担当クラスの受講生は全員前向きで助けられることが多かった。何らかの指示は一応与えるけれども、その指示内容を超える成果をその都度提出し発表し、私が不在にしても自分たちで検討し取りまとめ、次回の授業へつなげていくことができる学生ばかりでした。

年間テーマについては、私の専門分野が憲法なので、戦争や平和を取り上げようとまず決め、次にどのようにすれば戦争を実感でき平和のことを真剣に考えられるようになるかということを検討しました。実際そこへ行ってみる、そして、話を聞く、自分のことのように感じ、平和のために何ができるかを考える。これは簡単なようでとても難しい。とくに戦争は明るい気分で語ることはできません。でも「楽しくやろう！」を合い言葉に1年間取り組んできました。

2 活動内容

戦後 80 年の 2025 年に向けて、戦争や平和について学生が自分たちで学習できるような企画を立てられるようになる。これが「平和スタディツアーを企画しよう！」です。活動内容は次の通り。

(1) 事前学習 2024 年 9 月～12 月

行き先と個別テーマの検討

梯久美子『戦争ミュージアム』（岩波新書、2024 年）の通読

企画書（一次案）の作成と発表

企画書（二次案・三次案）の作成と発表

訪問先候補へのメール文案（一次案・二次案）の作成と検討

(2) 現地調査 2025 年 1 月～3 月

訪問先の決定

訪問先への依頼文送信

旅程の検討

質問事項の検討

訪問のうえ説明を聞きその後質問による聴き取り

(3) 成果報告書作成と合同報告会準備 2025 年 4 月～7 月

成果報告書の書き方の確認および原稿執筆

合同報告会に向けてプレゼンテーション資料作成および発表準備

3 おわりに

広島市の本川小学校平和資料館を訪問することに決まり、検討を進めていくなかで袋町小学校平和資料館にも訪問することになりました。それぞれに感じ取るところがあった受講生たち、40 歳前後になる頃、戦後 100 年です。この先もずっと「戦後」が続きますように。「担当するなんて絶対無理！」と思ってきた法政アクティブリサーチ、次期も担当することにしました。

2025年 松尾クラス 弱者に寄り添う

文責：松尾 秀哉

本年度の松尾クラスは「弱者に寄り添う」ことを考えることをテーマとした。これをテーマとしたのは、コロナ禍のなかで政治家が「まず自助、次に共助、最後に公助」と発言したことが「日本の変化」を如実に表していると松尾自身が問題意識をもったことがもとになっている。

誰もが苦しいコロナ禍で「まず自助」であるなら、人はどうすべきなのか。もちろん「密」は許されない。それゆえ「共助」に限界もある。公務員も、政治家も、すべての人が苦しんでいる時ではなかったか。「まず自助」そして「公助は最後」とは、国が苦しむ人達を見放すという新自由主義的な宣言ではないか。

少し前、格差社会の反動（治安悪化やドラッグの蔓延）に悩むイギリス政府は、キャメロン首相のもとで「大きな政府」ではなく「大きな社会」を打ち出した。それは「弱者は社会＝共助で支えよ」というスローガンであった。こうした政治の、いわば無策が結果としてブレグジットに向かう不満を熟成させていったとすれば、先の「まず自助、次に共助、最後に公助」は、同時に治安の悪化、犯罪の増加を招き、政治不信を熟成するだろう。果たしてそれでいいのだろうか。そう集まってくれた受講生になげかけ、テーマからインタビューなど一連の活動に入ってもらった。以下、総論的に書簡を述べておきたい。

（１）取り残されている「弱い人の中の弱者」

国際的な南北問題、さらに「南」の国の中にも格差があるとする「南南問題」があるように、「弱者」をひとくくりにできないことは十分に予想できたが、それを目の当たりにすることとなった。弱いとされている中でも、周りの力を借りてでもやっていける人たち、それでもできない人たちがいた。被災者の中の障がいのある方、子ども食堂にも来ることができないほど傷ついた方。つまり自助や共助で救えない方がいる。しかもそれは先に記したようにそれほど想像に難くない。そこに（冒頭の区分けに従えば）公助の余地があるのだが、印象としてはそこに公助は何の手も差し伸べていないような印象を受けた。みな、結局は「地域」「コミュニティ」に助けを求めている。政治はいったい何をするのだろうか。

（２）スーパーリーダーの登場とソーシャル・ビジネス

おそらくかつて（おそらく東日本大震災のころか）は「NPO」と呼ばれる団体が公的援助を受けながら弱者支援の中心になっていたが、現在はいたるところで「ソーシャル・ビジネス」、「社会的企業」と呼ばれるものに変容し、それを引っ張る強いリーダーのもとで弱者と呼ばれる人たちを助ける仕組みを、継続していけるよう、換言すれば利益を得て、事業を展開しようとしていた。

そうしたリーダーは昔から存在していたものの、単に弱者救済で止まらない事業継続という目標をもつことで、一層力強さを有し、またこうした分野に目を向けることは、換言すれば、いろいろ過去に試行錯誤されていたことも共通点であった。いずれも苦しみながらも、前を向いて様々に展開されていることを力強くも感じた。

こうしたソーシャル・ビジネスは共助の新しい形と映る。他方で、筆者には明らかに公助の低下の結果生まれた、市場優先主義の浸透の帰結であるようにも見えてならない。要は、これからの日本は、ますます市場優先主義に向かっていくのだろう、そしてそれを誰も疑問視しなくなるのだろうと感じられた。それは一つの形である。新しい時代の幕開けだ！でも、事業展開する、利益を得るということは、その対象外の人たちとの間に線引きがなされるということでもある。本当に苦しんでいる人たち、差別されている人たちを誰が助けるのだろうか。

今年は総勢8名が集まり、自然と2グループに分かれ、アポとりも想定外にスムーズであった。学生諸君の頑張りに拍手を送りたい。ここで培ったものは必ずどこかで力になっていくだろう。そして、いくらこの世界が新自由主義的価値観に染まろうとも、いな、染まれば染まるほど助けを求める人が出て来るのだから、世界に抗い、仲間や友人を信じ、力強く歩んでほしい。

なお、インタビュー後、それぞれのグループが感じた感想をもとに話し合いの時もあったが、震災、女性の貧困という日常性、非日常性という状況差もあり、また時間の制限もあり、答えをひとつにまとめるために学生たちの感想を一つの枠に無理やり閉じ込めることは避けた。いずれ類型化などが進んで、各自の卒業研究などで反映されればよいと考えている。今は自由な思いが大切だと考えた。

以下、補助員ページを付す。

松尾クラス補助員のまとめ

文責：下地 咲・平江 優菜

近年の日本では、社会的弱者という存在に注目が向けられている。社会において弱い立場にある人びとを指し示すとされるこの言葉が注目されているのは、近年、その数が急激に増加しているからである。1985年頃から問題視され始めていた相対的貧困の増加率が顕著になり、現在では日本の子ども六人のうち一人は貧困状態に陥っているとされ、中でもひとり親世帯の子どもの貧困率はさらに高い傾向にある。この深刻な貧困状態の背景には社会全体の少子高齢化や雇用体系の変化などがあり、また女性においては経済的理由のみならず社会規模での重大な知識不足により、12人に1人が生理用品の購入が難しく日常生活に支障を抱えているとされる。他にも、2023年まで猛威を振っていた新型コロナウイルスによる失業や就労困難、近年に頻発している災害によって被災者の社会での孤立や健康問題など、様々な理由で社会的弱者は増加している。

その解決のため国や自治体は新支援制度や補助金制度の政策を行い、改善に向けた動きも多くみられる。しかし、社会的弱者に対する支援は慎重かつ長期的に継続する必要があり、行政による政策だけでは社会的弱者の増加を食い止めることは難しいだろう。

そのため今回、松尾グループの法政アクティブリサーチは「弱者に寄り添う」ことをテーマとし、その中でも生徒たち本人が関心を持ったトピックとして「貧困」と「被災者」という二つのグループに分かれた。生徒たちはNPO法人や企業、市営施設などにヒアリング調査をし、社会的弱者の救済についての取り組みを多方面から探ることにした。具体的に、生理の貧困(オイテル株式会社様、龍谷大学エクステンションセンター様)、子どもの貧困(一般社団法人タウンスペース WAKWAK 様、NPO 法人レッドボックスジャパン様、一般社団法人 JOY 様)、災害(阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター様)、身体障害者の被災(NPO の法人ウィズアス様)においての社会的弱者の救済推進の取り組みである。

そして我々はこの全体の報告書を読み、貧困グループからは貧困に陥っている家庭や社会全体の知識不足によって苦しむ女性などの当事者には自助は限界があるため、自助ではなく共助と公助によって支援の充実を目指すこと、そして今の自助に丸投げしている社会から脱却するために、地域のコミュニティや自治体との協力で支援を充実させ、第三者に貧困の理解を深めさせていくという自助を鍛えることが必要であると感じさせられた。そして、被災者グループからは災害が起きてしまえば誰もが被災者になってしまう、そんな中で自助に依存することは更なる二次被害を生み出してしまう。それを防ぐために現段階で行われている公助や共助の状態を把握して災害に対して第三者の我々が理解し、自助の力を深めることが重要であると考えさせられた。

このまとめとして、現在のような自助に依存している社会では自助の限界によってさらに社会的弱者が生まれてしまうという悪循環ができてしまう。そのため、松尾グループ全体のテーマである「弱者に寄り添う」ために求められることは公助とは政策のみならず主体となって様々なコミュニティと連動して支援の充実を図ることであり、そしてコミュニティが協力し合い共助としての支援を行う、そこから我々が理解を深めることで自分自身の身を守る方法を把握するという自助の力を育成していくことであると考えた。

おわりに、今回第八期のアシスタントを務めた平江と下地の両員は、前年度の受講生であった時から松尾クラスの法政アクティブリサーチに参加し、今年度は教育補助員として本活動に関わる運びとなった。教育補助員の立場から見て、受講生たちには最初は不安もあったように見えたが、それぞれ自分たちの課題を乗り越えて、この授業を通して成長することができたように感じた。また、松尾クラスは前年度と比べて、より多くの場所にヒアリング調査をすることができた。様々な立場の方々の話を聞くことで、受講生たちも多くの学びを得ることができたことに対して喜んでおり、その声を聞くこと

ができて教育補助員をすることにとってもやりがいを感じた。来年度も、法政アクティブリサーチの授業を通して、受講生たちに楽しんで参加して頂き、もし機会があれば教育補助員にも是非挑戦してもらいたいと思う。

最後になりましたが、今回のインタビュー並びに報告書制作にご協力していただいたオイテル株式会社様、龍谷大学エクステンションセンター様、一般社団法人タウンペース WAKWAK 様、一般社団法人 JOY 様、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター様、NPO 法人ウィズアス様に心より感謝を申し上げます。

山田クラス

大テーマ：多文化共生社会の実現のために

担当教員：山田卓平

1. 本クラスのテーマについて

グローバル化が進む現代、人が国境を越えて移動し他国に住みつく流れが加速しています。海外に住む日本人はこの 30 年で倍増して約 130 万人。京都市の人口（約 147 万人）に近い数です。日本に住む外国人はそれ以上の伸びです。10 年ほど前は 200 万人ちょっとだったのが、今や 380 万人ほどです。京都府の人口（約 260 万人）よりもずっと多くの外国人が日本に住んでいるわけです。

でも、日本人の間でさえ世代や性別、職業などによって違いを感じるのに、外国人との間だとさらに大きな違いを感じやすくなります。それが摩擦を生み、差別や排外的な態度に繋がったりします。しかし、そんな態度はさらに大きな摩擦を生むでしょう。海外に住む日本人が同じように排斥されたら、皆さんはどう思うでしょうか。

そこで、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、地域社会の構成員として共に生きていくこと（＝多文化共生）が必要となります。本クラスでは、急速に在留外国人が増える中で、多文化共生社会を実現するために市民団体や行政などがどんな取り組みをしているかを調査し、課題と今後の方策を考えていきます。

2. 活動の概要

① 事前学習（2024 年 9 月～12 月）

ヒアリング調査をする前提として一般的な知識を得なければならないので、まずは多文化共生についての事前学習から始めました。ネット上の資料を閲覧した上で、南野奈津子（編）『いっしょに考える外国人支援：関わり・つながり・協働する』（明石書店、2020 年）をみんなで読み進めました。

② 現地調査（2025 年 2 月～3 月）

1 月からヒアリング先の選定に入りました。決まり次第、電話やメールでコンタクトを取り、日程調整をしました。実際のヒアリングは後期試験後の春休みに実施しました。

③ 報告書作成（2025 年 4 月～6 月）

ヒアリング調査の内容をクラスで報告した上で、報告書の作成に入りました。6/4 の授業では執筆担当部分の第 1 稿を検討し、内容について議論しました。各自書き直して 6 月下旬には最終稿をを仕上げました。

3. おわりに

多文化共生というスローガン自体は多くの人に受け容れられていますが、そのような理想の実現には様々な困難があります。多文化共生の実現のために最前線で努力されている方々にヒアリングし、ウェブで調べたり本を読んだりするだけではわからない現実を知ること、そしてそれを踏まえて今後どうすれば良いかを各自が考えることができれば、本クラスの目標は達成できたこととなります。皆さんもこの後の報告書を是非読んでいただいて、一緒にこの問題を考えていただければ嬉しいです。